

ロレンスにおける冬枯れと地下の世界

古 我 正 和

〔抄 録〕

ロレンスが若い頃父親を通して知った地下の世界は、後に蛇踊りや蛇の詩の中に再び現れる。また「西洋カリンとナナカマド」の詩の中でも、冬枯れとそれを慰めるための酒の熟成が、酒神ディオニソスにまつわる地獄の経験と結びついている。また彼はイタリアの溶岩がかたまった「平穩」の内側のエネルギーを、地球の鼓動や脈動としてうたう。彼の地下の体験はあたかも伏流のように意識の奥深く沈潜し、それにまつわる「蛇」や神話の世界となって作品の中で泉のごとく吹き出す。それはギリシャ以来の神々の醸し出す豊かな酒の熟成する世界であると同時に、今なお有限の存在たる人間の畏敬の対象となっている。ロレンスの生涯のはじまりがこの豊かな地下の世界であったことの意味は大きい。ロレンスは地下の世界に対して、本質的な暗いマイナスイメージと同時に、生きものを育ててきた豊かなエネルギーの根元として、それを感じとっていたのである。

キーワード ロレンスの地下体験、酒の熟成と冬枯れ、地球の豊かな活力、
酒神と地獄の体験

1

『息子たち、恋人たち』(Sons and Lovers, 1913) 中の父親の炭坑の世界、地下の闇の世界の体験は、炭坑そのものの描写がつぶさになされる作品が、その後あまり書かれなかったこともあって、その後の作品ではあまり現れず、そのまま立ち消えとなるように思われがちであるが、ロレンスがニュー・メキシコに行った後、北米先住民であるホッピー族の蛇踊りの体験の中に再びそれは現れる。その時には毒をもったがらがら蛇が、神官の口にくわえられて登場し、最後には地面に放たれて地中へ帰って行く。

またシチリア島の山荘フォンタナ・ヴェッキアで書かれた⁽¹⁾「蛇」(‘Snake’)の詩などに見られるように、タオルミーナに滞在した時には地下に対する関心の表れている詩が続々と書か

れる。本論では、詩集『鳥・獣・花』（*Birds, Beasts and Flowers*, 1923）の中に出てくる詩で、ロレンスの地下の世界をたどってみたい。

ロレンスはイタリアに滞在中、近くのエトナ山から立ち上る噴煙を見て、その中に蛇を感じとったように思われる。「蛇」の詩を読むと、その中に出てくる地面の色や地球の内部を表す言葉にそれが感じとられる。そしてそれは地下の世界で王位についていた蛇が、その後に王冠を奪われることの、いわば伏線となって出ていることが分かる。これについては、他の論文の中に詳しく書いたので、それを参照されたい。⁽²⁾

2

次に「西洋カリンとナナカマド」（‘*Medlars and Sorb-apples*’）の詩の中にそれを探ってみようと思う。これは次のように始まる。

I love you, rotten,
Delicious rottenness.⁽³⁾

しょっぱなから腐った（rotten）とか腐った美味しさ（Delicious rottenness）とか、妙に気になる言葉が出てくる。西洋カリンはざくろ（柘榴）に似て果物として食べられる。ナナカマドは小さいもので胡椒として使う。それは「7竈」のことで、その木は7回もかまどにくべないと燃え尽きないという。「腐った」という表現は、この詩に何回も出てくる。腐りかけないと美味しく食べられない。日本のいちじく（銀杏）の実に似ている。そしてこの「腐った美味しさ」という言い方の中に、この木の実とそれをうたうこの詩の持つ、独特の雰囲気秘密が隠されている。がそれよりも、後に出てくるディオニソス教につきまとう酒への傾倒、恍惚がこの「腐った」という言い方に感じ取られる。

I love to suck you out from your skins
So brown and soft and coming suave,
So morbid, as the Italians say.

What a rare, powerful, reminiscent flavour
Coming out of your falling through the stages of decay :
Stream within stream.⁽⁴⁾

上で述べた独特の雰囲気というのは、その木の実を皮から吸い出す（suck... out from your

skins) という食べ方や、その実の口当たりが良い (suave) とか病的な (morbid) という形容の仕方、さらには腐る時 (through the stages of decay) の美味さの表現に表れている。次にいよいよこの雰囲気には適合する酒が登場する。

Something of the same flavour as Syracusan muscat wine
Or vulgar Marsala.

Though even the word Marsala will smack of preciosity
Soon in the pussyfoot West. ⁽⁵⁾

初めから漂う独特の雰囲気というのが、その地の地酒のものであることが分かる。そしてここで改めてその独特の秘密を探っていこうとする。

What is it?
What is it, in the grape turning raisin,
In the medlar, in the sorb-apple,
Wineskins of brown morbidity,
Autumnal excrementa ;
What is it that reminds us of white gods? ⁽⁶⁾

皺くちゃの干しブドウや西洋カリン、ナナカマド、ブドウ酒を入れる気味悪い茶色の皮袋 (Wineskins of brown morbidity) などをもとめて、秋の排泄物 (Autumnal excrementa) と表現する。そしてこれらが白い神 (white gods) を思い起こさせるものだと言う。白い神とは何だろうか。

Gods nude as blanched nut-kernels,
Strangely, half-sinisterly flesh-fragrant
As if with sweat,
And drenched with mystery.

Sorb-apples, medlars with dead crowns.
I say, wonderful are the hellish experiences,
Orphic, delicate
Dionysos of the Underworld. ⁽⁷⁾

死の王冠 (dead crowns) の「王冠」とは、西洋カリンもナナカマドも正面が開いていて、見た目に王冠の形をしているからである。「死の」とは秋に取り入れられてしなびている事と、次の地獄へのつなぎである。ここで上にみられる「汗をかき、肉の匂いがして濡れている秋の排泄物」の雰囲気、地獄の経験 (hellish experiences) と結びつけられている。とすれば、オルフェイスやディオニソス (Dionysus) が先の「白い神々」ということになる。ここで言う地獄とは、ギルバート (S. M. Gilbert) も言うように、キリスト教でいうようなものではない⁽⁸⁾ のは当然である。ここまできると、「死の王冠」の中に地獄と神々のイメージへと導くものがあることが分かる。酒の神ディオニソスには、亡き母を追って冥界へ降りた伝説がある。Orphic は「オルフェイスのような、神秘的に満ちた」という意味になるが、これは古代オルフェイス教と関係がある。オルフェイスはアポロとカリオペの息子、トラキアの堅琴の名手で、亡き妻エウリディケを追って冥界に下り音楽で地獄の支配者ハデスを魅了して妻を連れ帰る許しを得たが、約束に背いて振り返ったため永久に妻を失う。後、女たちによって八つ裂きにして殺された。この事からあたかもキリストの犠牲のような信仰となったという⁽⁹⁾。その響きがここにはある。ディオニソス教の方は、ディオニソスが巨神タイタン族によって殺されて食べられ、残された心臓から復活したと伝えられ、あたかもキリストの復活のごとくにディオニソス教となった。信者は酒をがぶ飲みして狂い、死んでも魂は不滅と信じた。オルフェウス教団の方はそれほど酒は飲まず、音楽に浮かれたという。

A kiss, and a spasm of farewell, a moment's orgasm of rupture,
 Then along the damp road alone, till the next turning.
 And there, a new partner, a new parting, a new unfusing into twain,
 A new gasp of further isolation,
 A new intoxication of loneliness, among decaying, frost-cold leaves.⁽¹⁰⁾

くちづけ (A kiss) もオルガスム (orgasm) も、ここではナナカマドや西洋カリンの生命活動である。オルガスムとまで言う中に、秋の果物の人間にも似た開花や受粉、成熟などが表現されていることが分かる。曲がり角 (turning) や新たな別れ (new parting) などは取り入れ時など季節の分かれ目で、二者への分裂 (unfusing into twain) は冬枯れと、それを慰めるための酒への熟成のことである。上のオルフェイス教には、特に女性たちが群れをなして集まり飲み騒ぐ秘儀があるから、ここでもそのことと関連があると思われる。酒神ディオニソスは同時に植物神でもあり、枯れた植物をよみがえらせ、豊かな恵みを人々に与えた。これは次の詩行とも関係する。さらに深い孤独に浸りながら、地獄の不思議な小道を下って行くと、

The fibres of the heart parting one after the other

And yet the soul continuing, naked-footed, ever more vividly embodied
Like a flame blown whiter and whiter
In a deeper and deeper darkness
Ever more exquisite, distilled in separation.⁽¹¹⁾

酩酊による原初の地下の地獄の体験である。肉体が減じ魂が肉体化するの、冬枯れの死の様子である。そしてその魂が昇華してゆく (distilled) 過程が、原初の地獄のイメージと結びつく。と同時に上の古代ディオニソス教では、魂の不滅と復活が説かれたことも関係しているであろう。

So, in the strange retorts of medlars and sorb-apples
The distilled essence of hell.
The exquisite odour of leave-taking.
Jamque Vale!
Orpheus, and the winding, leaf-clogged, silent lanes of hell.⁽¹²⁾

ここで西洋カリンとナナカマドと地獄との関係が一部明かされる。この蒸留器 (retorts) の中に地獄のエッセンス (essence of hell) があるという。これは酒と共に味わう地獄、過去の永遠の体験である。

Each soul departing with its own isolation,
Strangest of all strange companions.
And best.⁽¹³⁾

人間の魂の孤独をうたう。肉体、すなわち秋の豊穡とその死の後に残るエッセンスや、それを体験した人間の魂の孤独である。ディオニソス教の「魂の不滅」が根底にある。仲間 (companions) とは一年の季節毎のさまざまな自然の移り変わりや、自然が育む動植物との出会いであろう。それはめまぐるしく移り変わる故に見慣れぬ (strange) ものであり、人間の魂はその最たるものそのまま去ってゆき、またその生こそが最善のものだという。ここには人間存在の根底に横たわる孤独、近代が生み出した繁雑な精神の領域に属するものからの解脱、日本の虚空の思想、世捨て人の思想がうかがえる。

Medlars, sorb-apples,
More than sweet

Flux of autumn

Sucked out of your empty bladders

And sipped down, perhaps, with a sip of Marsala

So that the rambling, sky-dropped grape can add its savour to yours,

Orphic farewell, and farewell, and farewell

And the *ego sum* of Dionysos

The *sono io* of perfect drunkenness

Intoxication of final loneliness.⁽¹⁴⁾

ここには、秋の排泄物である西洋カリンとナナカマドとブドウ酒による、酩酊と陶酔がみられる。そしてさらにディオニソスの陶酔と最後の孤独・死へと終わる⁽¹⁵⁾。これはディオニソス教に酔いしれる女性たちが、恍惚となることと通じる。ロレンスはキリスト教以前のディオニソス教やオルフェイス教の、近代の偽善の入らぬ、悪擦れのしない信仰をこそ信じた。それは先にみたように、地下の地獄でのものであり、これこそはロレンスの追求している過去の永遠の世界である。ロレンスにおける酒はこのような意味を持っていたのである。

3

このようにロレンスは、秋の豊穡をギリシャの神々の世界と関連づけて考え、一年の自然のめぐりを地下の世界に見いだしたが、その地下の豊穡さ、力強さを火山の吹き出す溶岩の中にも見たのであった。

21世紀になった今でも、地震と火山は人間の支配を免れ、最近になっても東南アジアを大津波が襲い、大災害をもたらしたのは誰もが知るところである。これらは共に地下のマグマに関係して起こるもので、これだけ人類の科学が発達しているにもかかわらず、人間の力ではそれをどうすることもできない。人間の努力を嘲笑うかのように、火山は何時にでも噴火し地震は時を選ばず起こる。

このように人間に無関係に、人間の受ける被害に無関心に起こる自然の在り方の中に、ロレンスは神のごとき敬意と畏れを抱いた。イタリアのナクソスでロレンスが目の当たりに見た黒々として堅い溶岩。その中に彼は王冠を剝奪され地下に追われた、あの蛇の不気味さを見たのである。

「平穩」(‘Peace’) もロレンスが地下への関心を示す今一つの詩である。この詩は詩集『鳥・獣・花』の冒頭を飾る「果物」という名の一連の詩の中に、果物とは無関係な詩として収められていて、読者を戸惑わせる。

ロレンスがニュー・メキシコの牧場へ来て2年目の1923年10月10日、メキシコへ旅行中にこの詩は「裸のアーモンドの木」(‘Bare Almond Trees’)や「熱帯性気象」(‘Tropic’)と共にニューヨークの「ネーション」(Nation)誌に掲載された⁽¹⁶⁾。ロレンスが1919年にイタリアに来て、タオルミーナに二年間住んでいた間にこの詩は書かれたと考えられる。この詩に出てくるナクソス(Naxos)については、ギリシャの旅行ガイドによると、エーゲ海のキクラデス諸島最大の島にナクソスというのがある、それはパロス島と共に大理石の産地として知られ、ディオニソスがゼウスの腿から生まれた場所だとされているが、どうもこの詩とは関係がなさそうだ。

もう一つはGiardini Naxosで、それはシチリア島最古のギリシャ都市であり、タオルミーナとエトナ火山を見上げ、海浜の切り立った岡の底にあって海に溶岩が突き出ている。この方がこの詩に合致している。

さてこの詩は溶岩が固まって、今は平穏そのものの状態の描写から始まる。

Peace is written on the doorstep
In lava.⁽¹⁷⁾

「溶岩で平穏と書かれている」という表現そのものにアイロニーがある。それは地下の世界への入り口だが、今までみてきたロレンスの地下の意識からみて、彼はこの入り口をどのような感慨を込めて通過したことだろうか。その気持ちがこの言葉の中にみられる。

Peace, black peace congealed.
My heart will know no peace
Till the hill bursts.⁽¹⁸⁾

黒ぐろとした溶岩が冷え固まった様子は「氷りついた平穏」(peace congealed)と表現されている。詩集の中でこれまでうたってきた一連の果物の最後として、この黒はやはり地獄の象徴となっている。これまでの一連の地獄の幻想の嵐からみれば、この黒い静かな溶岩を見てもとうてい平穏とはならず、果物にまつわる神話や伝説の絵姿が目の前を通りすぎるのである。

地獄の象徴としての溶岩が不気味で、普通の石のようではなく光っていて見るに耐えないものであり、それが溶岩流となって海岸に向かって流れる様は、さながら王者のようだという。これは「蛇」の詩に出てくる、地下の住人たる蛇とつながっている。また次のようにも描かれる。

Forests, cities, bridges

Gone again in the bright trail of lava.
Naxos thousands of feet below the olive-roots,
And now the olive leaves thousands of feet below the lava fire.⁽¹⁹⁾

森、都市、橋（Forests, cities, bridges）は文明の象徴であり、「また」（again）によって幾世代にもわたる文明の興亡を示す。ナクソスがオリーブの木の根よりも数千フィート下にあるのは、何回も噴火しては固まることを言っていて、シシリー島にあるナクソスが、溶岩が固まってきた都市であることを示している。いずれも「平穩」とは逆に、歴史と伝説の激しい動きを思い浮かべるくだりである。

Peace congealed in black lava on the doorstep.
Within, white-hot lava, never at peace
Till it burst forth blinding, withering the earth ;
To set again into rock,
Grey-black rock.

Call it Peace?⁽²⁰⁾

平穩の内側にあるエネルギーをうたう。最後の「それを平穩と呼ぶのか？」は、この詩の最初から詩人の考えてきたことである。地球の鼓動、脈動、それは生きていて毎年春になると地上に実りをもたらし、年末には死んでいく植物のようだ。それが最終行に出ていて、付加疑問によって溶岩に覆われたナクソスの荒れ地の不気味な平穩を見ながら、我われは計りしれない噴火力、マグマを思う。

ロレンスと地下の世界との出会いは、初期の自伝的作品『息子たち、恋人たち』を通してみることができるが、本小論の最初でも述べたようにその地下の体験は、あたかも伏流のようにロレンスの意識の奥深く沈潜し、それにまつわる「蛇」や神話の世界となって、メキシコやイタリアなど彼が巡った世界の各地で、泉のごとく吹き出すのである。

そしてこの地下の意識は、21世紀になった今でも地震や火山、それに伴う洪水、津波、火災など、あらゆる災難の根源とつながっている。そこにはディオニソスにまつわるギリシャ以来の神々の醸し出す豊かな酒の熟成する世界と同時に、今なお有限の存在たる私たち人間を翻弄する自然災害をもたらし、畏敬の対象となっている。

ロレンスの文学的生涯の始まりが、彼の父親の生活の本拠たるこの豊かな地下の世界であったことは大きな意味をもっている。それは近年叫ばれている、人間も動物も含まれる生命共同体を育ててくれる自然と通じるものであり、ロレンスは本質的にそれが持つ、マイナスにもブ

ラスにもなる豊かなエネルギーを感じとっていたのである。

【注】

- (1) Cf. Preston, P. *A D.H.Lawrence Chronology*. St.Martin's Press. 1994. p.84.
- (2) 拙論「生命共同体の担い手たち ロレンスと生きもの」佛教大学、『文学部論集』第90号、2006年、143-152頁。
- (3) D. H. Lawrence. *The Complete Poems of D. H. Lawrence, I*. eds. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts. London: Heinemann, 1972. p.280.
- (4) *Loc. cit.*
- (5) *Loc. cit.*
- (6) *Loc. cit.*
- (7) *Loc. cit.*
- (8) Cf. Gilbert, S. M. *Acts of Attention The Poems of D. H. Lawrence*. Cornell U. P. 1972. p.188.
- (9) Cf. Brewer. *Dictionary of Phrase and Fable*. London: Cassell, 1965. pp.665-666.
- (10) *The Complete Poems. op.cit.* pp.280-281.
- (11) *Ibid.*, p.281.
- (12) *Loc. cit.*
- (13) *Loc. cit.*
- (14) *Loc. cit.*
- (15) Cf. Lockwood, M.J. *A Study of The Poems of D.H.Lawrence Thinking in Poetry*. Palgrave, 2002. pp.105-106.
- (16) Cf. Preston. *op.cit.* p.106.
- (17) *The Complete Poems. op.cit.* p.293.
- (18) *Loc. cit.*
- (19) *Loc. cit.*
- (20) *Ibid.*, p.294.

(こが まさかず 英米学科)

2006年10月19日受理